

2023年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2024/9/30

団体名	NPO法人森ノオト	活動タイトル	親子で情報の海を正しくわたるために～子どもメディアリテラシープログラム作成～	
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景	
●地域の望ましい社会状況（ビジョン）	NPO法人森ノオトのビジョン：「地域や自然と調和した社会と、その担い手を育てる」 子どものうちから家族で地域や社会のニュースに関心を持ち、良質な地域情報を出会う機会が増えることで、地域とつながり、さまざまな環境活動・福祉活動を知ることができる。まちに出て、地域活動の実践者と出会う機会は、子どもたちにとって社会への肯定感や信頼を育むことにつながり、いずれは自分も社会の担い手になることを知る。その基盤となるメディアリテラシーを高めるために、多様な情報源からニュースを取捨選択することや、情報を読む・伝える際に主観・客観を持つことについて、「まわしよみ新聞ワークショップ」を通じて経験する。また、日頃から家族でニュースなどに関心を持ち、対話をする機運を社会全体で醸成していく。	小学校の授業の一環としてメディアリテラシーワークショップを実施		
●団体の社会的役割(ミッション)	NPO法人森ノオトのミッションは、「暮らしの足元から地域を編集し、一步を踏み出すきっかけをつくる」である。暮らしの足元とは、生活者一人ひとりが生きる地域であり、市民ライターが生活者の代表として地域情報と向き合い、編集者とともに地域情報の価値を解像度高く発信し、地域の活動者と生活者（読者）をリアルでつないでいく実践を積み重ねている。さまざまな地域活動に関心を持つ、まちで実践者を見かけた声かけ、イベントに参加してみるなど、はじめの一步は小さくとも、その一步がなければ活動の担い手の裾野は広がらない。市民ライターによる当事者性が高く手ざわり感のある情報をていねいに編集し発信するメディア活動によって、多くの人の「一步を踏み出す」後押しをする。			
●団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ●望ましい人的資源：地域社会に関心を持ち、積極的に地域をまわって数々の活動取材し、地域の現場で起こっている課題や価値を俯瞰的に分析できる力を持つ人材。ITスキルに長け、つくった情報を効果的に読者や受益者に届けるSNS活用をフットワーク軽く実践できる。 ●望ましい物的資源：メディアリテラシー教育に関わる講座をオンライン配信できる環境の整備、動画作成や配信の機材導入 ●望ましい活動資金：全体収益のうち、メディアの運営を支える寄付の割合が10%を超える状態をつくるため、ファンドレイジングを強化する。委託事業・自主事業・助成事業のバランスを見極め、特に委託事業では利益率を高めることで、団体のオリジナル事業やコンテンツ開発に力を注げる環境をつくる。 ●望ましい情報：NPOに対するITツールやサブスクリプションの無償提供や割引などの情報や、ファンドレイジング、NPO経営強化のための研修情報が適切なタイミングで入り、スタッフの強化育成につながる状態をつくる。 			
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
親子で情報の海を正しくわたるための「子どもメディアリテラシープログラム」ツール作りに取り組んだ。まずは【親世代】と、子どもとメディアの付き合い方についての課題感を整理・類型化する座談会を実施した。次に、プロト版ツールを使って【子ども世代】に響く形で伝えるメディアリテラシーワークショップを学童や小学校の授業で実施した。最終的に、親子でツールを体験する時間を設けて、家庭で取り組むためのガイド付きで、10のテーマからなる『メディアリテラシー新聞』を完成させた。親・子世代ともに、家庭での実践やメディアリテラシーについての理解度は座談会・ワークショップ参加後、参加91名+21名（計112名）のいずれも上がった。ツールはオープンソースとしてダウンロード可能にし、記事・報告書を公開した。		※以下の表記：●アウトプット、■アウトカム <子どもとメディアの付き合い方についてのお悩み収集> ●座談会4回実施、15名+オンラインアンケート合わせて32名から親サイドの悩みを収集 ■16のエピソードに類型化。デジタル機器使用ルールについては「契約書」ひな形、その他メディアリテラシーについては「ワークショップツール（新聞）」に集約する方向性を決定 <「子どもとメディア・ヒヤリハットを体験しよう！」ワークショップのテスト開催> ●2024年5月に学童で2回（計13名）、2024年6月に小学校5年に1回（91名）にワークショップ実施 ■WS参加者の前後の変化をルーブリック評価で確認し、WS内で扱ったテーマすべてにおいてメディアリテラシー理解・意欲が向上。教育現場でのレクチャーの型と、ツールの有効性が示され、家庭実践用に最終調整 <親子で情報の海を渡ろう 下村健一さん講演会 @ニュースパーク> ●7月に講演会実施。親子10組21名（+23名がオンライン）参加し、メディアリテラシーに関する講義とツールのプロトタイプを使ったWS実施。■参加者の理解度・家庭での実践意欲が向上。 <ヒヤリハット集をまとめた活動報告及び提言レポートの公開（動画への誘導含む）> ●ヒヤリハット集・活動報告及び提言レポートを公開。案内のチラシを横浜市立小学校335校の5年生へ配布（36,000部）。 ■動画視聴数 411回（2023年度）、活動報告提言レポート記事（講演会案内600PV、講演レポート215PV、事業報告188PV） 教育機関、企業からの問い合わせ（小学校1件、ケアプラ1件※WS実施8/26、来年のメディア系イベント参加依頼1件）		
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
○メディアリテラシーを伝えたい小学生の年代に合わせたコンテンツ制作 ○アウトプット：家庭でできるメディアリテラシー実践のためのツール（10テーマのメディアリテラシー新聞） ○アウトプット：スマホ利用契約書 ○学校、学童との接点 ○メディア関係者や教育関係者とのネットワーク		今年度事業を実施する中で注力したのは、メディアリテラシーを最も身につけてほしい小学校中学年～高学年へ伝わる「旬なエピソード」の選定であった。情報の流れがはやい現代においては、取り上げたテーマ自体も入れ替わる可能性がある。そのため、正解が掲載されたテキスト形式ではなく、【家庭で話すきっかけを作るためのツールとして、最低限の基礎知識のみ書いてあり、それ以上は親子で会話しながら、調べて深める】構成とした。今後もエピソードやテーマの更新は必要である。 また、昨年同様に、元から「メディアリテラシー」そのものを知らない親子に広めるためには、①入り口として学校の授業で取り入れてもらう②夏休みの自由研究としての実施を促す③PTAなどと連携し、親世代への告知機会を創出する④携帯事業者などと連携し、携帯を持ち始める世代が必ず見るようなコンテンツに昇華していくなど、広く周知できるルートを探していく。		
■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）			この1年間の活動を通じて	「家庭でのメディアリテラシー実践」を促すツールが完成し、取り組んだ方は、家庭や日常においてメディアリテラシーを実践続ける一歩を踏み出す を達成しました。
■ 受益者の具体的な変化（自由記入）			新聞風ペーパーの活用により、子どもたちは、10の事例にあげたような事象に接した際、自分ならどうするのか、人も自分も傷つかないようにするにはどうしたらいいか考えるきっかけを得た。大人も、同ツールを、情報受発信の落とし穴を家族で確認する際のガイドとして活用できるようになった。	